

大戦の開始、經過、終局

東京文科大学助教授
東京女子高等師範學校教授

文學士

齋藤清太郎

——本會臨時總會席上に於ける講話——

○開戦前に於ける列強の

關係

此の度の戦争の起つた所以を了解しやうと思へば、先づ戦争の始まる前に於ける列強國の關係に就て、大體の知識を有する事が必要である。列強の關係を更らに二つに分けて、獨逸側と、聯合國側として申さうと思ふ。

○獨逸とその同盟國

一八七一年、今から四十九年前に、獨逸が佛蘭西との戦に勝つて、その愛國者が多年の熱望であつた國民的統一を完成し、歐羅巴の中原に覇を唱

ふる獨逸帝國を建てた。その後には於ける最初の皇帝はウキルヘルム一世、即ち今の獨逸皇帝の祖父に當る。その宰相ビスマルクの外交に對する方針は、平和の維持であつた。それは、新たに得たる獨逸國民の統一を益々固くし、又多年分裂の爲めに、發達する事が出来なかつた國力の涵養を計る上に於て、最も大切なことであつたからである。それで此の望むが如き平和を維持せんが爲めには、ビスマルクは、先づ佛蘭西の復讐戦争を防ぐことに力を用ひた。獨逸は佛蘭西にアルサス、ローレーン二州を割讓せしめ、五十億法の償金（ツラシ）を支拂はしめた。而してビスマルクは佛蘭西の復讐戦争を防ぐ手段として、佛蘭西が歐羅巴の強國の或

るものと同盟を結ぶことを妨げた。佛蘭西單獨の力ならば彼は恐れなかつたが、唯恐るべきは佛蘭西が歐羅巴の強國中に同盟者を見出すことであつた。ビスマークの非凡なる外交手腕は、よく其の

目的を達することを得た。即ちビスマークは一八七二年に、獨逸、埃太利及露西亞を聯合せしめて新謂三帝同盟を作つて佛蘭西を孤立せしめた。その後一八八二年に三國同盟即埃太利、伊太利、獨逸の同盟を成立せしめた。三國同盟の條約文は秘密に附せられてあつたが、一九一五年、即ち此の度の戦争の二年目埃太利政府は、その三、四、七の三ヶ條を發表した。その他は今日迄世に出て居ないが、大體同盟の主意は、三強國互に相助けて、その中の一ヶ國が他の國から攻撃を受けた時は、兵力的援助を與へること、所謂防禦同盟であることは一般に認められて居る事實である。その上にビスマークは、感情の上より英吉利を好まなかつたに係はらず、外交の目的から、英國と親善な關

係を保つことに努めた。斯くの如くにして彼は佛蘭西を孤立せしめて復讐戦争を起すこと能はざらしめ、彼が期待したる如くに歐洲の平和を維持することを得た。

歐洲に平和の維持せらるゝと、もに獨逸の商工業は最新科學の技術に應用せられたること——その根柢は國民教育にある——國民主義を基礎としたる科學的組織と、政府の保護政策とに依りて隆々として起り、獨逸の商品は漸く世界の市場を蠶食するに至つた。而してビスマークは三國同盟に依りて國境の安固を得たる後、商工業者の希望を容れて殖民政策に着手し忽ちにアフリカに於て廣大な殖民地を作つた。

一八八八年、獨帝テキルヘルム一世は病死し、皇太子フレデリック一世位に即かれたが、咽喉病の爲めに逝かれ、同年ウキルヘルム二世位に即かれた。その後二年の後、老宰相ビスマークは辭職した。以後大宰相は置かれたが、最後の決裁は皇

帝自身に在つた。皇帝はビスマルクを斥けたと云うてもよいのであるが、帝の外交方針は重なる點に於てビスマルクの遺策を踏襲したものであつた。すなはち三國同盟は獨逸外交の中軸として依然存續せられた。新皇帝は此の頃世間より甚しく攻撃せられて居るが、英才有爲の人物であつたことは疑を容れぬ。併し、ビスマルクの如き政治家としての大さ、深さ、廣さを缺き、そして練熟と、將來に對する遠慮が足りて居なかつた。これが帝の今日の失敗を招いた所以である。皇帝が位に即かれた時は、先刻申した様に、國勢隆々として興つた時であつた。帝は此の機に乗じて、獨逸の文化と政治的及經濟的勢力を世界の各地に及ぼし、單に管に獨逸國民の勢力を擴張するのみに止らず、これを獨逸皇帝の權力の下に統一せんことを企てた。これは皇帝の野心であつて、また獨逸國民の野心であつた。彼等は之が爲めに、侵略主義に傾き、之が列國の怒を招ぎ、今日の有様に至

らしめたのである。ウイールヘルム二世は彼の野心を達せんが爲めに、獨逸の將來は海にありとなし、大に海軍を擴張し、殖民地を開き、極東に於ても獨逸國民の爲めに將來の根據地を作つた。また獨逸商工業の爲め新らしき市場を開拓することを怠らなかつた。思ふに皇帝の胸中に秘められたる究極の目的は、英國の海上權を打破して、その既に有せる世界的帝國の位置を獨逸に奪はうとしたのであらう。十六世紀の頃、西班牙、當時の世界に於て最も強大の海軍を有し、世界の海上權を掌握して居た、英國は之を打破して今日の地位を得た、獨逸帝は更に英國を打破してこれに代らんと欲する野心を懷いたのである。されど英國の海軍力は強大にして基礎固く、到底俄に之に對抗すること難きを以て、帝は之に對して他日の機會を待ちつゝ、先づ帝の世界政策を實現せしむる第一着手として土耳其領内に勢力を扶殖し、遂に波斯灣に於て印度洋に達する間に、獨逸の政治的及經濟

的勢力を伸張せんと企てた。バクダド鐵道は即ちその表現である。而して獨逸は之が爲めに新たに土耳其と結んだ。

次に埃太利が獨逸と同盟を結んだ理由は何かと云へば、これは全く露西亞に對抗するに方りて、獨逸の後援を得んと欲したるがためである。露と埃とはバルカン半島に於て、どうしても衝突せねばならぬ運命をもつて居たのである。一八六六年の戰役後埃太利は獨逸と分れた。而して獨逸帝國建設せられたる後埃太利は勢力の發展を西に望むことは到底不可能となつた。埃太利にとつて唯一の發展方面は南東のバルカン半島である。然るに巴爾幹半島に發展せんと欲すれば、同じく此方面に南下せんと欲する露西亞との衝突は到底免るゝことを得ない。埃太利は、單獨の力を以てしては、露西亞に對抗することが困難である。此に於てか埃太利は獨逸の援護を求め之と同盟を結ぶに至つた。一八七九年の獨埃同盟條約には露西亞が兩同

盟國の對手國であることが明記せられて居る。而して獨逸も埃太利に同盟することは、露西亞を威嚇して漫りに獨逸に向ひて侵略的行動を取ること能はざらしむる利益がある。獨埃兩國の露西亞に對抗するは、一面より見れば、チュートン民族とスラヴ民族との對抗である。埃太利は領内に幾多のスラヴ民族を包含して居る。埃國政府は彼等に對して多く自治權を與へ居れるも、尙ほ彼等の分離獨立を防ぎて、よく之を統禦せんが爲には、獨逸の後援を得ることが大切である。この點よりしても、埃太利は終始獨逸との同盟を必要としたのである。

露西亞は一八九〇年代迄は、専ら南バルカンに進出せんと企てたが、一八九一年西比利亞鐵道の起工式を擧げたのを手始めとして、發展の方向を専ら極東太平洋に求めた。一九〇四年日露戰役の開始せらるゝに至る迄、露西亞は極東政策に没頭した。その結果、遂に日本の存立を危うしたるが

爲めに一九〇四―五年の日露戦役は戦はるゝこととなつた。日本軍は連戦連勝し、露西亞の極東政策は一大打撃を被むりたると共に露西亞國內には革命的騒亂起り、國力疲弊して暫くの間は到底外に力を用ひる能はざることゝなつた。埃太利は此の機會に乗じ一九〇八年時の埃洪國外相エーレンタールは土耳其政府より所謂ミトロヴィツァ鐵道の敷設權を得、之に依りて維納よりエーゲ海岸のサロニカ港に至る迄直接に交通し得る鐵道線路をその權下に有することゝなつた。ついで土耳其に革命起るや、また其の機に乗じて、曩に一八七八年の伯林條約に依りて行政權を與へられて居た土耳其領のボスニヤ、ヘルチエゴヴィナの二州を併合して全く之を埃太利の領土に加へた。塞耳維は此二州の住民が塞耳維人と同民族に屬し、豫ねてより之を併合して大塞耳維國を建設せんと欲する意志ありし爲めに、埃太利が此二州を併合したることを見て猛烈に反對し、露西亞も埃太利の巴爾

幹半島に於ける勢力の俄に増大したること見て、同じく憤慨した。されど當時露西亞は極東戰役の失敗と革命亂との爲に蒙むりたる創痍未だ癒えず、したがつて武力を以て之に抗すること能はざりしに反し、獨逸は埃太利に後援を與へ、干戈に訴ふるも辭せざる決心を示したれば塞耳維も遂に之に屈し、埃太利は克くその目的を達することを得た。這回の大戦役は實に此の時に胚胎して居る。

次に土耳其は如何にして獨と同盟を結ぶに至つたかと云ふに、近く一九〇八年に土耳其に革命起つて、古來の君主專制政治は改まりて立憲君主政治となつた。此の革命の目的は單に自由主義、民權擴張を目的として起つたのでなかつた。從來土耳其の政治は君主專制政治であり、したがつて宮廷的官僚政治であつて、壓制を事とし腐敗を極めて居た。領内の基督教國民は漸次離反し、外國は機に乗じて内政に干渉するも之に抗すること能はず。國威は日に衰退に赴くばかりであつた。是に

於て所謂青年土耳其黨は之を憤慨し、先づは立憲政の弊政を改めて富強の道を講じ、以て凌辱せられたる國權の恢復を圖らんと欲す、弊政改革の爲めには政體を變更して立憲政治と爲すの外なしと考へ、遂に革命を起したのである。故に彼等は愛國的國家主義から革命を企てたのであつた。而して青年土耳其黨のエンベル、バシヤを始めその他軍人は、此の目的から獨逸を提携して英の海軍、露の陸軍に對抗し、出來得べくんば英の權威の下にある埃及を回復しやうと企てた。故に土耳其が獨逸を提携したるは、其の武力を信じて、英露の壓迫に對抗すると共に塞耳維、希臘等が領土擴張の野心を制止せんとするにあつた。而して獨逸は革命前よりして土耳其と親善の關係を保つことに努め、漸く利權を獲得し、勢力を扶植して遂にアナトリヤ鐵道及バリタット鐵道の敷設權を得るに至つた。

ブルガリヤが獨逸に味方して戰爭は加はつたの

はセルビヤ、ギリシヤ、ルーマニヤに對する復讐と領土擴張の野心から出たのである。大戦役の始まる三年前一九一一年にブルガリヤ、セルビヤ、モンテネグロ、ギリシヤの四國は同盟し、土耳其の領地を奪ふ目的を以て所謂バルカン戰役を始めた。然るに戰勝の結果、土耳其より割取した土地を如何に四國に分つかと云ふに至つて彼等の間に紛争を生じ、ブルガリヤは、セルビヤ、ギリシヤ、ルーマニヤ三國の爲めに攻められて遂にドブルジャ並にマロドニカ方面に於て一旦土耳其より得たる領土を彼等に奪はるゝに至つた。ブルガリヤは常に之を憤慨し就中セルビヤに對して最も敵意を挾んで居た。今やセルビヤが塊獨と戰を始むるに方りて獨逸は有利の條件を以てブルガリヤを誘つたのでブルガリヤはこの機に乗じて領地を擴め、勢力を伸張せんと欲する野心よりして遂に獨逸の誘に應じてこれと行動を俱にするに至つたのである。(以下次號)